

沖縄・宮古島における戦後初期国語教科書の研究

— ガリ版印刷による教科書 —

吉田 裕久

(2005年9月30日受理)

Research of the Okinawa-Miyakojima version Japanese-language-textbook of the postwar period

— In the case of the textbook by mimeographing printing —

Hirohisa Yoshida

The original textbook was edited after World War II in Miyakojima. It was a textbook by mimeographing printing. The textbook itself hardly remains today, so it is very difficult to clarify the actual condition. I investigated as much as possible. In this paper, I treated only 1 Japanese language textbook. Consequently, the following thing was mainly clarified.

1. Japanese language textbook was might remained only 1 books.
2. The textbook in Miyakojima was printed personally in Miyakojima.
3. Japanese grammar textbook was also edited.

Key words: Okinawa, Miyakojima, Japanese language textbook of the postwar period, textbook by mimeographing printing.

キーワード：沖縄，宮古島，戦後国語教科書，ガリ版印刷による教科書

はじめに — 本稿の位置と目的 —

沖縄は、第二次世界大戦の結果、その戦後を日本から切り離され、アメリカの施政権下に置かれるという異常な状況の中で迎えることになった。筆者は、先に「戦後初期沖縄版国語教科書の研究 (1) (2)」において沖縄本島の場合の、そして「沖縄・八重山における戦後初期国語教科書の研究」において沖縄・八重山の場合の、それぞれ戦後初期のガリ版印刷による、その意味ではきわめて特徴的な(稀有の)国語教科書の実態・特色等について報告してきた。本稿は、それらに続く戦後初期沖縄版国語教科書の実態を究明するその第三弾として、沖縄・宮古島の場合を取り上げる。この宮古島を取り上げることによって、当時の群島支庁(沖縄本島・八重山・宮古島)を一わたり捉えることになり、沖縄の全域を取り上げるという所期の目的を達成することになる。

筆者は、1995年2月28日から同3月2日まで、宮古島における戦後初期の国語教科書の実態を求めて現地

調査した。平良市教育長の大山高春氏をお訪ねし、氏を介して当時の状況を知りうる関係者・知識人、同時に資料保存の可能性のある図書館・博物館等を訪ねた。もはや当時から五十年も経っていたが、中には、この稀有な体験をかすかに覚えていたり、また関連の情報・資料を提供してくれたりする人がいた。また宮古島の図書館・博物館では、当時の新聞や関係史資料を見出すことができた。今、これらを総合して、本稿を報告することができる。

とは言うものの、資料的には決して十分とは言いがたく、むしろこれら調査できた範囲の中で、したがって現段階で分かり得る部分だけを報告することになることをあらかじめ断っておきたい。先の八重山の場合と同様、関連史資料の今後の発掘に待つところが大きい。本稿がその機会になって、こうした関連史資料が発掘・保存されることになるならば、思いそれに過ぎるものはない。

I. 戦後初期の沖縄・宮古島における教育・教科書事情

それでは、戦後初期の沖縄・宮古島における教育、および教科書は、どのような状況だったのか。宮古島の場合、一年ごとにその事情が異なっていたと言ってよい。この点については、先に見てきた沖縄本島、そして八重山の場合と同様の状況を呈していた。敗戦直後の昭和20年度から文部省教科書が使用される昭和23年度に至るまで、年度ごとに、背景となる教育・教科書事情と国語教科書とを見ていくことにする。

1 昭和20年度一敗戦で迎えた戦後

(1) 敗戦直後の混乱状況

敗戦の実態は、敗戦の数だけある。ここ宮古島も、その例に漏れない。宮古島教育の再興は、まずハード面としての学校を再建させることからスタートした。当時の学校——茅葺き教室（多くは「青空教室」）の様子が、『平良市史』に、次のように記されている。

敗戦と同時に教育の方向を失った学校は、校舎施設の壊滅的被災もあって、物心両面の極度の疲弊と混乱の中で、いかにして明日への手がかりを見出したらよいか苦慮していた。むらの青年会場、拝所、民家、学校の堆肥舎等に分散させていた児童を、学校に集めて授業を再開したくても、校舎は全壊または大破して用をなさなかつたので、当分は分散した状態のまま授業を行なわなければならなかつた。しかし、このようにむらの各施設でまがりなりにも学習できた学校は恵まれた方で、ほとんどの学校が校庭の青空の下で、あるいは樹の陰を利用した「青空教室」で授業を再開せざるをえなくなつた。しかも敗戦の混乱の中では、それも週に二〜三回程度の出校であつた。

教育の再興でまず何よりも急がなければならないことは校舎の修理と建築であつた（中略）校舎建築と言っても、雨露をしのぐだけの粗末なカヤブキ仮教室で、台風でも来ようものならひとたまりもないような急ごしらえの教室ではあつたが、青空教室に比べるとはるかにましであつた。このようにして、各学校に造られた仮校舎は、畜舎に似ているところから「馬小屋教室」とよばれた。また学校によっては、米軍の野戦用テントを払い下げてもらい仮教室として利用したところもあつた。¹⁾

（下線は引用者、以下同じ）

学校の再建とは名ばかりの、青空教室、馬小屋教室、米軍の野戦用テントでの仮教室という形で学校再興が語られている。ともかく何とかして学校を再開させた

いという関係者の意気込みが伝わってくる。それでは、教室等、学校の内部は、どんな状況だったのか。

どうにか仮教室は出来たものの、机、腰掛は皆無の状態、ウドンの空箱、雑品箱などが代用され、土間に座つての学習であつた。教師たちは墨をすつて板に塗り、手作りの黒板に間に合わせた。とにかく何もかも欠乏し、ないなづくしの状態であつた。「学校教育は従来通り続けてよろしいが、軍国主義的、親日的内容の教育を行なつてはならない。」との軍政府の指示を受けて、教科ではまず「修身」が廃止され、歴史、国語などの内容で、少しでも軍国主義、親日的なつながりのある箇所は削除された。²⁾机・腰掛もうどんの空箱・雑品箱で代用させ、黒板は手作りで間に合わせた。しかし、それはまだ工夫された方で、多くは土間に座つて授業を受けるという状態であつた。すべて物が無い状態の中で、利用できるものは何でも利用するというたくましさも感じられる。学校は、こんな厳しい現実であつたのである。

(2) 軍事教育、「日本宣伝」からの脱皮

こうして敗戦直後の虚脱・荒廃状態から、宮古島の教育も次第に戦後の再建に向けて動き出した。その重要な転機になつたのは、昭和20年11月30日から5日間にわたって開催された民主主義講習会であつた。そこでは、旧教育に代わる新教育が説明された。

宮古支庁では一九四五年十一月に五日間にわたる民主主義講習会を開催するなど、軍国主義から民主主義に急転換する世がわりにいち早く対応した。「大和の世」から「アメリカ世」への変転は、このような民主主義の掛声から始まつたといえるだろう。³⁾戦争が終結した時点で軍国主義から民主主義への転換は当然としても、ここで特徴的であつたのは、日本に関する教育が許されないということであつた。このあたりの事情については、「みやこ新報」が、次のように述べている。

軍事教育又は軍事訓練を為さぬこと、性質上軍事教課を指導せぬこと等は従来屢々報道された通りであるが今指示第四項によると日本の宣伝を指導せぬことと禁止されているが、然し日本史、日本法律習慣等は教授することができ、宗教課目は学生に要求することは出来ぬが、若し欲するなら学生が宗教教課を選択するもよいとなつている。⁴⁾

こうして宮古島においても、日本本土同様、新教育の講習会が実施された。その指示内容も、軍事教育を廃し、民主・平和教育を推進する新教育の実現に向けてのものであつた。ただこの宮古島では、沖縄本島同様、「日本宣伝」をしないということが固有に付け加えられた（この点については後述）。

そして、これを機に、翌年度に向けて、教育・教科書を具体的にどうするかという新しい段階を迎えることになるのである。

(3) 新教科書の編纂企画

①昭和21年度は宮古島独自の新教科書

明けて昭和21年2月、教科書に関する施策が具体的に動き出した。これに関する資料を引いてみよう。

こうした時流の中にあつて、学校教育も軍政府が示した教育の方向づけを受けて、一九四六年二月には中等、国民両校の新教科書編纂が宮古支庁学務課(後に教学課と改称)によって計画され、三月には一九四六年度用教科書の内容検討が行われた。教科は公民、国語、英語、地理、算数、理科、音楽、体操の八教科で、各教科三〜八名の編集委員があてられた。こうして戦後の教科書はガリ版刷りで学校に配布され、学校ではさらに自校の児童用をガリ版刷りで作成した。⁵⁾

ここに、昭和21年初期の宮古島における教科書編纂のあわたしさが語られている。とりわけ興味深いこととして、

- ・ 2月には、国民学校、中等学校の新教科書編纂が宮古支庁学務課で計画された。
- ・ 3月には、その教科書の内容検討が行われた。
- ・ 教科は、国語を含めて八教科であった。
- ・ 各教科、三〜八名の編集委員があてられた。
- ・ ガリ版刷りで学校に配布した。
- ・ 学校では、さらに自校の児童用をガリ版刷りで作成した。

という部分があげられよう。

ここには、宮古島の戦後初期の教科書を見ていく上で、いずれも重要なポイントとなることが取り上げられている。これらが実際に実現したかどうかも含めて、以下に詳しく見ていきたい。

②国民学校・中等学校用新教科書の編纂企画

「みやこ新報」には、これらの具体化について、次のような記事が紹介されている。

教育界から軍国主義を駆逐し、純真な青少年の再陶冶問題は識者を問わず父兄のひとしく望むところであるが、殊に教科書の再吟味は切実にとりあげられつつあり、その衝に当る支庁学務課では郡下知的教育の検討にまじめな態度を持し、早急に解決を図るべく計画している。而して中学校の教科書は学校教師の専門的立場からその責任に於て改訂を行うと共に国民学校の教科書は殊に新鮮な教材を盛って編纂すべく学務課陣頭に立って活動しその成果はかつ目されている。⁶⁾

「国民学校の教科書は新鮮な教材を盛って学務課で

編纂」、「中学校の教科書は学校教師の専門的立場で改訂」という具体的な計画が示されている。

③新教科書編纂委員会の発足

宮古島独自の教科書編纂について、いよいよその機運が高まってきた。引き続き、当時の資料を見ていきたい。「みやこ新報」(21・3・13)には、「新教科書を編纂」という見出しで、次のような記事が掲載されている。

自由の学園建設へ！幼い細胞から誤れる軍国主義を一掃し真の自由と民主化的学園の構想を盛る新しい教科書編纂に関しては垣花教学課長の手許で計画を進めて来たが、愈々新学期より採用すべき教科書の内容検討を行うべく来る十九日午前十時より教学課に於て初の委員会が開催される。委員の顔触左の如し

委員長 垣花教学課長

囑託、池村実秀、池村一男両属

委員 (△は主任)

国語科、△与那覇寛長、仲元銀太郎、松川寛保、平良定正、友利完一、垣花実、本村恵源、山内朝源
そして、資料によれば、この計画は、以下のように実行に移されていく。

④教科書編纂委員会の開催—「平和建設」を内容に教科書編纂方針—

「みやこ新報」(21.3.21)には、「「平和建設」を内容に教科書編纂方針」の見出しのもと、3月19日の教科書編纂委員会の様子が、次のように報告されている。

国民学校の教科書編纂委員会は一昨十九日午前十時より宮高女に於て初顔合せが行われ、支庁長挨拶、委員長の編纂方針、課程表の説明があつて各科別打合会に移り、これが終つて全員集合して各科別打合会の結果報告があつて散会したが教科書編纂の基調たる方針左の如し。

一般方針

一、米軍政府の指示、示達を体し軍国主義的神道、親日的教材を絶対排除し世界平和建設、平和愛好を内容とする教材

一、科学精神啓培、技術重視の教材

一、本郡の状況を徴し郷土愛好精神の多く盛られた教材

一、勤労を愛好し生産増強に挺身し得る如き教材

一、真に公民的教養を昂め情操を醸化し正しい意志訓練に資する教材

科目、教材等各分科会で研究

科目、教材等に関しては再検討を必要とする所から各分科会を左の如く開催して研究をなし今月中に教学課に報告、月末に再び委員総会を開くことになった。

公民科（略）

読方科…三月二十三日午前九時祥雲寺で分科会を開催、児童生活にそくした言語修練に適するもの一般方針の趣旨に合する教材の取り入れ

つまり、垣花委員長が教科書編纂の一般方針4項目（1 軍事的・親日的教材の排除、世界平和建設・平和愛好の教材、2 科学精神啓培・技術重視の教材、3 郷土教材、4 公民的教養・情操醇化、正しい意志訓練に資する教材）を示した後、教材等各分科会（教科別の分科会）が持たれている。しかし、ここでは具体的な結論は出ずに継続審議となり、それぞれ別の機会に具体化していくことを話し合っただけで散会している。国語科（読方科になっている）の場合、その4日後の3月23日に分科会を開催して、「児童生活にそくした言語修練に適するもの一般方針の趣旨に合する教材の取り入れ」について話し合うことが決まっている。新年度まで後1週間、どれだけ急いでも間に合わない厳しい日程ではあった。

この状況がこのまま継続していれば、国語教科書をはじめ、宮古島独自の教科書が多く登場したはずである。が、歴史は、そのように動かなかつた。

2 昭和21年度一ガリ版印刷による教科書の企画を中途放棄へ一

(1) 教材配当表の提出準備

「一九四六自四月至五月ニ於ケル教学課事業計画」によれば、1946（昭和21）年度新学期の教科書は、次のように計画されていた。

二、国民学校教科書編纂

1、別紙編纂要項ニ依リ一九四六年三月十九日ヨリ実施継続

2、四月二十日迄新教科書各科教材配当表提出完了ノコト

3、四月二十二日 全配当表各学校宛送付予定
教科書印刷（謄写刷）ハ用紙準備ノ上実施予定⁷⁾

つまり、3月より始まった教科書編纂計画は、4月にさらに具体化されることになった。4月20日までに、教材配当表を教学課に提出。二日後の22日には、各学校宛てにその教材配当表を送る。教科書の印刷は、用紙事情が好転すれば直ちに実施される。以上のことが具体的に示されたのである。教材名が示されれば、各学校、各教師によって、とりあえずの教材準備は可能であると判断されたようである。しかし、この教材配当表が果たして提出されたのかどうか、そしてその肝心の教材配当表の内容がどのようなものであったのか、残念ながら資料を見いだせていない。しかし、もしあったとしても、おそらく一般方針、および国語科

の基本方針レベルで止まったのではないかと。言うのも、具体的な教材名まで用意するには、あまりにも日程的に厳しかったのではないかと推測されるからである。

(2) 沖縄本島から教科書一宮古版教科書の断念

ところが、この教材配当表の具体化も分からないうちに、「宮古タイムス」（21・5・20）には、次のような報道があつて、歴史の展開の早さに驚かされる。

本郡の国民学校は沖縄と同様初等学校と改称されることになり近く告示される。教科書も沖縄と同一のものを使用し先便で着荷した。尚これが連絡の為学務科主任・池村実秀氏が上嗣した。

配当表提出期限の一ヶ月後、5月20日には、宮古島独自の教科書の影はきれいさっぱり見えなくなり、一言も、それこそ何の前触れもなく「教科書も沖縄と同一のものを使用し」と述べられている。さらに驚くことには、すでに「先便で着荷した」という迅速さである。この急転直下の展開・結末にまさに驚くほかない。それまで準備してきたことは何だったのか、関係者ならずとも、あまりの早い進み行きに驚きを禁じ得ない。しかし、これで懸案の昭和21年度の教科書問題は切り抜けたことにはなる。問題は、「沖縄と同一のもの」の中身の問題である。と言うのも、沖縄本島そのものが、この時期は自転車操業の状況であったからである。本島自体が、決して万全ではなく、むしろ編纂作業も追われていたし、教科書の発行自体も十分な状況になかったというのが実状だったからである。しかし、この点も、具体的には知るよしもない。国語教科書の場合も、その種類、冊数など、具体的には残念ながら知り得ない。

そして、教科書印刷のために保存していた用紙が、配給の対象となったことが「みやこ新報」（21・6・9）に、以下のように報じられている。

・学用品教科書等多数入荷

……教科書も各学年を通し多く入荷したので教学課では之を配給することになった。又以前教科書を作る為保有されていた用紙も適宜配給されることになった。

ここに、昭和21年度版宮古島独自の教科書編纂作業が潰えたことがわかる。

この短くも、大きな盛り上がりを見せながら潰えた昭和21年度教科書編纂計画を国語科の場合で振り返ってみると、

1946. 2 中等・国民学校両校の新教科書編纂

1946. 3. 19 第1回新教科書編纂委員会開催

「平和建設」を内容に教科書編纂方針

1946. 3. 23 祥雲寺で分科会予定

児童生活に言語修練に適するもの一般

方針の趣旨に合する教材の取り入れ

1946. 4. 20 教材配当表提出締め切り
 1946. 4. 22 教材配当表各学校宛配付予定
 1946. 5 沖縄本島と同じ教科書を使用
 というようになる。編纂方針も編纂委員も決まりながら (3. 19), 結局は「沖縄と同じもの」(5. 20) を使うことになった。おそらく十分な部数ではなかったであろうから、教師が板書して、児童はそれを書き写すという形で実施したのではないかと思われる。それも、学習者達の回想によれば、週に二日、半日授業、雨が降れば休みという状況であったらしい。ともかく、こうして宮古島独自の教科書は、結果的には幻の教科書として案の段階で中絶したのである。

3 昭和22年度

それでは、昭和22年度に向けては、どうだったのか。『宮古文教部事務施行状況 自一九四七年度 至一九五〇年度』によれば、「一九四七年度事務施行概況」(宮古文教部教学課) の中で、教科書の配布状況について、次のように報告されている。

軍国主義教材の削除命令により従来の教科書が全然使用出来なくなったので、新しく編纂しなければならなくなり、見本を沖縄本島および日本本土からとりよせ各学校と文教部で印刷して生徒に配布しているが、本年度四月以降の配布状況は

- 1 各学校で印刷したもの
 - 算数 前期用 (1年から8年まで)
 - 読方 前期用 (1年から8年まで)
 - 地理 6年以上
- 2 文教部で印刷したもの

英語教科書	14,628冊
全教師用書	156冊
青年実業学校読本	3,546冊
初等学校読方 (1-8年)	14,141冊
- 3 その他の教科書は沖縄文教部より送付したものを数部ずつ各学校へ配布す。⁸⁾

こうして見ると、宮古島独自の対応というよりも、沖縄としての対応の一環として行われていたことがわかる。戦後初期の宮古島の帰属が沖縄県の中の宮古としてやっていけるとなると、これに歩調を合わせようとしたことが伝わってくる。ともかく、こうした状況の中で、具体的にどこまで実現したかわからないが、国語(読み方)教科書の場合も、初等学校(1-8年)は各学校と沖縄文教部で印刷したものが配付されたことになっている。ただ、沖縄文教部の編纂も、時期ごとに改訂を加えたので、どの版なのか、詳細はつかめない。

4 昭和23年度

昭和23年度になると、教科書の状況はどのようになったのだろうか。「宮古タイムス」(23・6・25)は、社説において、「教科書整備が急務」という見出しのもとに、次のように報じている。

学制が文教部の英断によってあらゆる困難を克服し日本本土並に改革されたことは郡民齊しく感謝してよい。然し今の学校教育の姿を有り体に言えば仏彫って魂入らずの譬に洩れず幾多の教育的隘路がある。その中でも吾人が最も遺憾に思う一つは教科書の不揃いである。児童も教師も無手勝流と言うても敢えて過言でなからう。これ迄文教部は相当苦心して謄写刷の教科書の配給は行って来たがこれとて極く一部で教科書全体の需要数よりしては焼石に水ではなからうか。終戦後四ヶ年を経た今日かかる姑息な手段には決して賛同は出来ない。一日も早く本土よりの教科書供給法を講ずべきである(大島は既に実施しつつあり)之迄子供達は新学期ともなれば新しい教科書を手にして希望に燃え自習に余念がなかった。當時を回想し只今では高校生は勿論中、小学生迄印刷物を紙はさみにひらひらとはさんで登校している姿は何んとあわれか? 当局並に教育審議会諸君はこれの解決に努力すべきである。

教科書は届いているものの、部数が決して十分でなかった。また「紙はさみにひらひらとはんきで」という状況から、本というよりはプリントの集成という感じであったのだろう。昭和23年を迎えて、まだ教科書が十分な状態でなかったことが知らされる。記者の持った印象に、当時の状況を垣間見ることができるよう思う。

こうした声を反映してか、8月の夏休みには、次のような新聞記事「教科書一万冊FSで到着」(宮古タイムス, 23・8・13)が見えている。

終戦後資料難で学校教育の充実も相当の努力なき限り困難視されていたが日本本土よりの第一回教科書の到着により愁眉開かれ着々成果をあげつつあるが、又去る八月八日入港のエフエス三九二号で日本本土より教科書五十箱入が到着、当局を喜ばせており教育資料も戦前に復帰するものと予想されており、南西諸島教育面は大いに期待さる。尚冊数にして約一万冊の小、中、高校用である。

待望の、日本本土から、文部省編纂の国定教科書が到着したのである。

なおこのことに関して、『一九四八年度文教部事務施行状況』には、「日本教科書の採用」の項に、次のように記されている。

終戦後教科書がなかったため、旧日本の教科書の

有害な所を削除して使用したり或はプリントによって授業を進めていたが、六月に初めて軍政府の斡旋により日本から教科書が輸入された。

これによって教育の理念が具体化され、児童生徒の生活の実際に生かされることになった。

教科書の種類 118種 冊数 132,803冊⁹⁾

なお、このことに関して、次のようなインタビュー(1995.3.1)を試みたので、以下に記しておく。

下地明増氏(原紙切りを担当)、伊良皆春宏氏(印刷を担当)の談によると、文部省の教科書を下敷きにして、アメリカ製の原紙に鉄筆で複製して、これまたアメリカ製の輪転機で印刷して、児童に配布したという。その筆耕・印刷の時期は、昭和22年9月頃だったという。さらに伊良皆氏は、自分が印刷したのは国語だったという。「<おはなをかざる みんないいこ>に記憶はありませんか」と向けると、何かを急に思い出したかのように「それです、それです」とおっしゃった。印象的なインタビューであった。

これに関連して、沖縄県教職員組合宮古支部『宮古教職員会二十年史』にも触れられたところがあるので、傍証として取り上げておく。

もっとも困難をきわめた教科書の入手については米軍や沖縄本島にもあれこれ手配したがはじめのうちはなかなかうまくいかず、ごく少数入ったものを各学校独自にガリ版刷りにしたり、文教部で印刷して配布したりした。一九四七^(マ)学年中に各学校で印刷した教科書は「算数前期用(一年から八年まで)、地理は六年以上」全児童分で、いずれもガリ版で刷って用いた。また文教部として印刷した教科書は「英語教科書一四、六二八冊、同教師用書一五六冊、青年実業学校読本三、五四六冊、初等学校読方(一八年)一五、一四一冊(琉球政府文教局編「琉球史料第三集」四四p)。そのころは米軍の指示で小学校でも英語を教えなければならず、わずかしかない教科書をどのように活用するかで苦慮したようだ。砂川恵敷は自ら英語教科書編さん委員長になり、「松本武雄、島村潤一、下地健一らが委員になって編さんした教科書を下地明増らは深夜おそくまで米軍配給の謄写インクを使って印刷した。インクに汚れた顔をふきもせずがんばっていたことをよく覚えている」と語っている。ガリ版印刷にあたっては伊志嶺恒雄、下地明増らが中心になり、羽地恵康、伊良皆春宏、洲鎌玄亮らも直接(米国製手まわし輪転機)作業にたずさわっている。¹⁰⁾

こうして、昭和21・22年の両年、および23年度の前半は、沖縄文教部編纂の教科書を利用しながら進めてきていた(板書したものを書き写す、ガリ版印刷して

プリントで配付)が、23年度の2学期くらいからやっと待望の日本本土の教科書が使用可能になったのである。こうして、宮古島における戦後初期の教科書問題は、その過程では紆余曲折しながらも、幕を閉じることになったのである。

II. 国語教科書

となると、宮古島で独自に編纂された教科書はなかったのかということになる。が、筆者は、現在、宮古島で作成されたガリ版印刷による国語教科書を1冊だけ確認できている。文法教科書を含めると、2冊ということになる。さらに、国語教科書の参考書まで含めると3冊ということになる。いずれも、ガリ版印刷によるものである。この時期ならではのものとして、合わせて考察の対象とすることにする。

1 宮古高等学校国語教科書

宮古総合博物館に、高等学校(旧制中学校)国語教科書の現物が所蔵されている。今日、宮古島で確認できる唯一のガリ版印刷による教科書である。表紙には、『1947年 昭和22年 宮古高等学校(男子)教科書』と表題があり、下半部に、福岡県在 長沢洋一氏寄贈、それに1972.8.24の日付が墨書されている。合冊されたプリント集とでも言ったら良いであろうか。福岡県在住の長沢洋一氏(この時に宮古高等学校男子部の生徒であった)が、1972年8月24日、かつての担任教師であった大山高春氏に寄贈されものだという。表紙の墨書は、その時に、大山高春氏が記名されたものである。その後、これを所持していた大山高春氏が仲宗根将二氏(調査時の宮古総合博物館長)に寄託されたものを、仲宗根氏が博物館に収められたものという。そのため、本書が宮古総合博物館に所蔵されているのである。

この合冊集には、『国語 一年用』、『日本文典 一年用』、『数学』、『物象』、『生物』、『英語』の六教科の教科書が集成されている。もちろんいずれもガリ版印刷による教科書である。ページが中途になっている箇所があったりするので、これが全てであったとは言えないかもしれない。が、少なくとも、ここに存在する教科書は編纂・発行されていたことだけは確かである。この中から、文法教科書を含めて国語に関する2冊の教科書を取りあげることにする。

(1) 『国語 一年用』

表紙には、「国語 1年用 1947 宮古高等学校」とある。昭和21年6月、宮古中学校は宮古高等学校男子部と校名を変更した。つまり、沖縄における初等学校・高等学校の制度を適用したもので、高等学校1年

生は、本土の中学校1年生にあたる。発行年月日は、不明である。が、表紙に1947と表示されているので、1947年度用教科書として編集・発行・使用されたものであることがわかる。

本教科書には、目次は記されていない。全54ページだが、未完の形で終わっているため、この続きが存在していたものと思われる。したがって正確に言えば、本書の全体ページ数はわからないということになる。以下、保存されているこの合冊集に基づいて検討していくことにする。

教材名を、筆者・出典、および前教科書との関連がわかるものについては、これも含めて記すと、次のようになる。

- 1 「伸びて行く力」(小林一郎)
- 2 「発明王エジソン」(澤田謙) ← 「岩波国語」2-18 「人間エディソン」
- 3 「私設大使」(山本有三) ← 「中等国語一(11)」〔後〕-2 「私設大使」
- 4 「詩二編(生長・海)」(千家元麿) ← 「岩波国語」巻1-8 「詩二編(生長・海)」
- 5 「蜘蛛の糸」(芥川龍之介) ← 「岩波国語」巻1-12 「蜘蛛の糸」, 純正国語読本巻一「蜘蛛の糸」
- 6 「屋根」(志賀直哉「暗夜行路」) ← 「岩波国語」巻1-12 「屋根」
- 7 「遊学の門出」(長谷川二葉亭「平凡」) ←
- 8 「ふるさと」(石川啄木) ← 『純正国語読本』1-23 「ふるさと」
- 9 「雀の子」(小林一茶) ← 『純正国語読本』1-16 「子供」?
- 10 「運」(松村武雄「世界童話体系」)
- 11 「オリンピック」(山川健) ← 吉田弥平「中学国文教科書」1-26 「オリンピック」
- 12 「少年時代の野口英世」(奥村鶴吉「野口英世」) ← 「岩波国語」1-24 「野口博士の少年時代」
- 13 「良寛さま」(北原白秋「洗心雑話」) ← 「岩波国語」1-19 「良寛さま」
- 14 「苺」(「野草集」) ← 『純正国語読本』1-8 「苺」
- 15 峠の茶屋(夏目漱石「漱石全集」) ← 「岩波国語」1-6 「峠の茶屋」
- 16 最低にして最高の道(高村光太郎) ← 「中等国語一(11)」〔後〕-1 「最低にして最高の道」
- 17 測量生活(武藤勝彦) ← 「中等国語一(11)」〔後〕-3 「測量生活」
- 18 俳句への道(富安謙次) ← 「中等国語一(11)」〔後〕-5 「俳句への道」

これらを見渡してみると、戦前期の中等学校国語教科書、とりわけ五種検定本(昭和15年)の巻一からの

取材が目立っている。その際、当時から評価の高かった岩波書店編集部編(中心は西尾実)『国語』(「岩波国語」と記した)を中心にして(7教材)、それに五十嵐力編『純正国語読本』、吉田弥平編『中学国文教科書』等の教科書を参考にしながら編纂したのではないかと考えられる。

同時に、文部省編「中等国語一(11)」〔後〕(国文編、昭和21年度後期用) — いわゆる暫定教科書に取られた教材も、4教材と目立っている。しかも、この暫定「中等国語」からは、一年生の後篇の最初五教材の中から四教材が選ばれている。この中で採録されなかったのは、「尊徳先生の幼時」(富田高慶)であり、これは日本的という理由からではないかと推察される。

また内容的な特色の一つとしては、古典作品が全く見られないことである。これも、たまたまというよりも、意図的であったと考えられる。「日本のものを排除する」という絶対命令がある限り、これも自然のように思われる。

ただし、小説・随筆・俳句・短歌・詩・説明文という文章ジャンルへの配慮は伺えるものとなっている。各教材に少しばかり立ち入ってみよう。

1 「伸びて行く力」(小林一郎)

「若い人はたのもしい。若い人は伸びていく力をもつてゐる。この伸びていく力が国の宝である。世の宝である。何物もこの力を遮る事は出来ない。」(p.1)という書き出しで始まっている。若者のスタートを奮起させる文章が、第一教材になっている。編集者の意も、ここにあったと思われる。ちなみに、終わりも「伸びていく力をもつ若い人はたのもしい。その力をいつまでも失つてはならない。身体は老いても、心はいつも若くてあるべきである。」(p.3)と、冒頭部に呼応する形で終わっている。若者に対する熱いメッセージである。

2 「発明王エジソン」(澤田謙)

二〇世紀の天才・エジソンが成し遂げた発明が、粒々辛苦、脂汗をにじませて獲得したものであることを書いた伝記教材である。「天才とは、一パーセントの靈感と、九十九パーセントの流汗とで出来るものである。」(p.4)、「天才とは、努力する凡人である。」(p.7)など、努力することの勧めとなっている。

3 「私設大使」(山本有三)

フランスのバステュー広場で、水を撒いた歩道で仰向けに倒れた馬を、着ていた上衣を脱いで馬の脚の下に敷いて助けた日本人の話。「この人の名前は今もつて分かりません。しかしこの人こそ日本人の中の日本人です。かう云ふ人があることによつてともすると誤解されやすい日本や日本人といふものが、どれだけ

正しく海外の人に理解されることか、その価値ははかり知れないものがあると思います。名前も職業も分かりませんが、かういふ人こそ大使にも公使にも劣らない立派な私設大使です。」(p.10)と、すぐれた日本人の逸話について紹介している。日本・日本人について触れないといいながら、その意味では珍しい教材である。日本人の強さ、偉大さでなく、優しさについて描かれたところが問題なしと判断されたのだろうか。

4 「詩二編(生長・海)」(千家元麿)

木が生長する姿を見て「見る見るうちに／育つてゆくのをみると／自分はいかに／育つてはみられない／無駄な時間を費やすのがたまらない。／およそ自然は時間を浪費しない。」(生長)と、海に対して「充溢した歓喜で張りつめたやうな海面の美しさ」、「静かな力のこもった海」、「永遠の緑を深く湛へて盛り上がつてゐる海」(海)と、自然の雄大さを讃えた詩二編から成っている。生き方を鼓舞する、そうしたねらいがあったのであろう。

5 「蜘蛛の糸」(芥川龍之介)

カンダタのエゴイズムが、自らを再び地獄に落としてしまう話。道徳性に培う話として採録されたのであろう。

6 「屋根」(志賀直哉「暗夜行路」)

「暗夜行路」の冒頭、子に対する母の愛情が描かれた部分である。志賀直哉の誉れ高い名文であるという定評も教材化の背景にあったかも知れない。

7 「遊学の門出」(長谷川二葉亭「平凡」)

学問をするためにふるさとを出る、父母と別れて、ふるさとと別れる、その様を描いたもの。宮古島の生徒にとってもいつかは我が身、そうした点からも選ばれたか。

8 「ふるさと」(石川啄木)

石川啄木の短歌8種。「ふるさとの山に向かひていふことなしふるさとの山は……」、「ふるさとの訛りなつかし……」、「なつかしき故里にかへる思あり……」と、故郷を歌った歌が多く選ばれている。

9 「雀の子」(小林一茶)

小林一茶の俳句15句。「われと来てあそべや親のない雀」をはじめとする5句の雀シリーズが冒頭に置かれている。一茶の、ほんのりと優しさのにじむ俳句が選ばれている。

10 「運」(松村武雄「世界童話体系」)

「富貴命あり。運の悪いものはとても人間の力では救われぬ。」(p.26)——米と肉を贈って助けたつもりが、それで食傷して死んでしまったという、運のない逸話。示唆深い話である。

11 「オリンピック」(山川健)

オリンピック精神について語り、五つの輪の由来を述べて、国際親善に培うことを表明した文章。

12 「少年時代の野口英世」(奥村鶴吉「野口英世」)

世界的な医学者となった野口英世の少・青年時代を伝記風に綴った文章。

13 「良寛さま」(北原白秋「洗心雑話」)

童心の持ち主・良寛禅師の子どもたちとのかくれんぼにまつわる逸話。

14 「苺」(「野草集」)

「初夏と梅雨とを思ふと、直ぐに私の心を躍らせるものがあります。苺です！私は苺なしに、春から夏に越えることが出来ません。」(p.41)と、苺に寄せる尋常でない思いを綴った随筆。

15 峠の茶屋(夏目漱石「漱石全集」)

「おい」と声を掛けたが返事がない。」で始まる漱石の『道草』の冒頭部分。人の好いお婆さんの言葉と振る舞いなどが印象的である。

16 最低にして最高の道(高村光太郎)

利欲・不平・ぐち・怒りなどを止してみんなと一緒に大きく生きよう。見かけも掛け値もない裸の心で空を仰いで生きよう。みんなと一緒に最低にして最高の道を行こうと呼びかけた詩。一から出直しの時代状況をよく反映させたものと言ってよかろう。

17 測量生活(武藤勝彦)

測量部の仕事、厳しい条件下で続けられるものの、互いに助け合い、支え合うことによって成し遂げられる、その生活について叙したもの。

18 俳句への道(富安謙次)

句作についての入門、手引きがなされている。「感じたままの正直な気持ちを季題に託して17字で述べれば俳句になる」(p.54)と説いている。

こうして採録された18教材を見通してみると、これからの生き方、人としてのあり方などを考えさせる文章、故郷を見つめさせる文章、あるいは著名な文学作品(小説)などで占められていることに気づかされる。つまり、この教科書を読む男子中学生を強く意識した教材選択の目が想像できるのである。中学生、戦後、——様々な出発を意識させられる国語教科書である。

ここに集成された『国語』は、54ページ(未完)。ガリ切りされた文字は、確かに筆跡が異なっている。何人かで行ったとしても、この大量の文章を短時間で仕上げることは難業、おそらく相当の努力が傾けられたであろうことは想像に難くない。

(2)『日本文典 一年用』

合冊集には、『日本文典 一年用』も収められている。これも、目次、発行年月日等はない。全26ページ。目

次の形で示せば、次のようになっている。

前篇

- 第一章 序説
- 第二章 名詞
- 第三章 代名詞
- 第四章 動詞
- 第五章 形容詞
- 第六章 助動詞
- 第七章 副詞
- 第八章 接続詞
- 第九章 感動詞
- 第十章 助詞

後篇

- 第一章 動詞の活用
- 第二章 形容詞の活用
- 第三章 形容動詞の活用
- 第四章 音便
- 第五章 助動詞の種類及び活用

これは、まさに当時の文法教科書の典型である。「文典」という書名は古めかしく、戦前的でさえある。前篇で口語文法の総論、および品詞、後篇で活用について学習する構成になっている。説明した後に練習という形で展開している。なお、例文中に、「駿河の富士山は世界の名山である」(p.1)、「あの山の上には神社がある」(p.3)、「東京は日本の首府だ」(p.4)など、日本本土や沖縄本島ではとても許可されないであろう語句・表現が見受けられる。むろんここ宮古島も先に見てきたように、教材選択において「日本教材」「神道」関連については一般方針の中で禁止の対象であった。が、前掲の『国語』にしても、3「私設大使」(山本有三)にも見られたように、「日本」的なるものが散見される。ここ宮古島では、そこまで神経質な検閲はなかったのかも知れない。

2 中学校国語参考書

(1) 『新制中学国語学習の手引 一年用 (1)』

国語教科書ではないが、国語教科書の手引きが、ガリ版印刷で発行されたものが残っている。『新制中学国語学習の手引 一年用 (1)』(宮古教育会研究部発行 宮古民生府文教部印刷、発行年月日なし、全36ページ)が、それである。日本本土では、こうした参考書・問題集の類書は多く発行されている。が、本書は、宮古島で発行されたものである。国定教科書が届くようになって、教科書のガリ切りから解放されて、次にこうした参考書・問題集に向かったのであろうか。現地調査していたとき、大山高春氏が、ご自宅に所蔵しているとして提供して下さいたものである。目次を書き

出してみよう。

- 1 第一歩
- 2 世界をつなぐもの
- 3 雨にもまけず
- 4 おはよう
- 5 昆虫記
- 6 潮目
- 7 日記から
- 8 初夏の奈良
- 9 りすを育てる
- 10 末ひろがり
- 11 涼み台

本書は、紛れもなく、昭和22年に新制中学校用国語教科書の第1冊として編纂・発行された文部省著作の国定教科書、その参考書である。国定教科書の参考書・問題集がガリ版印刷で発行されているのは、全国的に見れば皆無ではない。とりわけ戦後まもなくは、ままあった。ただ印刷事情も好転してきた昭和22年以降となると、やはり希有な事例と言ってよかろう。これも、市販のものがなかなか手に入らなかった当時の状況にあったのではないか。全教材、1「仮名づけ」(漢字の読み)と2「語句の意味」とで成っている。簡易な参考書である。

III. 当時の学校・教科書への回想

さて、当時、学習者たちは、この状況をどのように見ていたのか。最後に、この点について見ておきたい。

1 学習者の回想

(1) 下田ハル「あの日 あの頃」(宮古郡城辺町福嶺小学校、昭和21年卒)

昭和二十一年私達の教室は小学校の裏手の松林でした。

机がソーメン箱でバサナスの枯れ葉をアダナスづなであんだのが腰掛けでした。靴もなく素足で走ったり歩いたりしました。足の親指を小石等でくじつてしまい血を流しながらもケンケンして登校したものでした。

ノートや筆箱を風呂敷で包み女の子は背負って男の子は肩に背負って走ると筆箱の鉛筆がガチャガチャなり鉛筆の芯が折れたりしたものでした。その鉛筆を削るのに瓶のわれをきれいに取りナイフがわりにそれで削ったものでした。

本は先生が一冊持たれ生徒は先生が書かれた文章を見て写したり話しを聞いたりして勉強はしたものでした。

その頃の先生は厳しいが人情味豊かな先生でした。雨の日も風の強い日も青空学校は休みでした。雨あがりの日は農繁休業で休みになり畠にかり出されたものでした。¹¹⁾

(2) 伊志嶺善三「知識のふるさと 福嶺小学校の思い出」(宮古郡城辺町福嶺小学校, 昭和23年卒)

昭和二〇年八月一五日の終戦から間もなく、学校が再開された。すべてが鉛のように重苦しかった戦争が終わり、先生をはじめ、全生徒が晴れ晴れとしていた。まだ教科書もなく、学用品も不足していたが、先生方は、ガリ版刷りを配ったり、地面を黒板代わりにするなど、いろいろと工夫していた。心のこもった、手作りの教育であった。¹²⁾二人とも、宮古郡城辺町福嶺小学校の卒業生である。教科書は先生に一冊、それを視写しながら、学んだ記憶が語られている。おそらく21年当時のことだと思われる。

2 教師の回想

(1) 「ガリ版刷り教科書と教員の生活状況」

終戦になって狩俣が直面した危機は、戦中からつづいていた食糧不足で、それは終戦直後さらに悪化した。こうした生活苦のなかで、人々は戦争終結にひとまず胸をなでおろしたものの、これからの社会は一体どうなるだろうか、将来への期待と不安の入り混じった気持ちになっていた。

「これからは民主主義の世の中だ」と、耳慣れない民主主義のことがあらゆる集会の場で叫ばれ、教育も行政もすべてアメリカの民主主義によって行われるようになるといい、戦中は信じて疑わなかった日本の国策すべてが否定された。宮古に進駐してきた米軍は、日本に関する教材を扱わないように指示し、本校においてもそれは忠実に守られ、歴史、修身教材は一切排除され、国語教材も文学教材にしばられた。算数は従来の教科書によって指導された。

黒板も教科書もほとんど戦災でなくし、あり合わせの板材をつぎ足し釘で打ち付け、墨をすってぬるという間に合わせの黒板づくりが、教師と児童の手でなされた。ノート、紙類はない。かろうじて残っていた印刷物の裏紙が、筆算用紙として一日に数枚与えられるだけである。チョークは、米軍からの配給があったが、わずかの量でしかなかった。

このようにすべてがないないづくしのころ、宮古支庁学務課では新しい教科書を独自に編さんする計画が立てられ、学務課長垣花恵昌を編さん委員長とし、各教科に三〜八名の委員をおいて編集し、ガリ版刷り教科書を作成した。このガリ版刷り教科書は各学校に配布され、これをもとに、各校では自校の分をガリ版で書き写し印刷した。

タビオカのかゆをすすっている教師達は、生活苦にあえぎながら、それでも鉄筆をにぎり、ガリ版刷り教科書の作成にあたった。食糧不足のため欠席する児童が多く、欠食する児童もいたので、授業は午前中だけにして午後は食糧増産にあてた。¹³⁾

こうして何とか、学校・授業を再開していこうと、教師たちはガリ版に向かったのであった。

おわりに

最後になったが、本稿が成るについては、大山高春氏に深甚の感謝を申し上げねばならない。氏の援助がなければ、この調査自体がきわめて困難であったろうと思う。そして、1995(平成7年)2月28日(19:00~22:30)、インタビューに答えて下さった伊良皆春宏氏、下地明増氏、仲宗根将二氏に、これまた心からのお礼を申し上げたい。

現地調査からすでに10年を経ってしまった。

【注】

- 1) 『平良市史』第2巻通史編Ⅱ(戦後編), p.76
- 2) 1に同じ, p.77
- 3) 1に同じ, p.78
- 4) 「みやこ新報」, 昭21・1・17
- 5) 1に同じ, p.78
- 6) 4に同じ, 昭21・2・15
- 7) 1に同じ, 第6巻資料編4, p.663
- 8) 7に同じ, p.665
- 9) 引用は、『平良市史』第6巻, p.668
- 10) p.10
- 11) 福嶺小学校創立七十周年記念事業期成会『七十年誌』, 1989.8, p.159
- 12) 11に同じ, 1989.8, pp.160-161
- 13) 平良市狩俣小学校『百年誌』, 1988.1, pp.42-43